



Title	台湾桃米村、宮城県南三陸町における歩く観光：震災復興地域でのフィールドワークから
Author(s)	樋口, 葵
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73748
Type	bulletin (article)
File Information	CATS12_22.pdf



[Instructions for use](#)

台湾桃米村、宮城県南三陸町における歩く観光

—震災復興地域でのフィールドワークから—

樋口 葵

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士課程 2 年

1. はじめに

こんにちは。私は国際広報メディア・観光学院博士課程 2 年目の樋口葵です。本報告では、私が博士論文の対象地域としている台湾桃米村と宮城県南三陸町の 2 地域のフィールドワークを通して歩く観光、旅育を考えていきたいと思います。台湾桃米村に関しては、去年の夏に初めて行き、今年の夏に再度行きました。南三陸町については震災の次の年から入っていて、現在で 7 年ほど通っています。

こちらが本日の予定です。

本日の発表では、エコミュージアムという概念を使って発表していきます。今回のメインテーマである旅育についても、同様にエコミュージアムの概念を用いて考えていきたいと思えます。事例としては、先ほど軽く申した通り、台湾桃米村と南三陸町です。本日はそのなかでも、台湾桃米村における重要な組織、「新故郷文教基金会」と南三陸町の観光を担う組織「南三陸町観光協会」、そして、震災後にできた地域住民による組織「一般社団法人復興みなさん会」に焦点をあてて、歩く観光について見ていこうと思います。

2. エコミュージアムについて

まずは、エコミュージアムとは何なのか、その概念について説明いたします。エコミュージアムとはエコロジーとミュージアムを合成した言葉で、地域全体を博物館と見立てるもので地域住民が主役のミュージアムです。「Museum」という博物館としての活動と、「Heritage」、「Participation」という住民の主体的な運営が要です。「Museum」という博物館としての活動とは、要するに参加博物館、資料館、生涯学習施設と言われて展示するという事です。「Heritage」とは、地域内の遺産の現地保存ということ事です。簡単に言うと、どのように保全していくかということになります。そして 3 つ目の「Participation」が住民の主体的な参加です。特にこれは、エコミュージアムの中で極めて重要な部分です。この 3 つから、歩く観光を捉えていきます。

3. 台湾桃米村の事例

(1) 桃米村の概要と 921 大地震における被害

事例の 1 つ目は、台湾桃米村における組織です。台湾桃米村は、台湾の真ん中辺りに位置

する村です。台湾全体は九州と同じくらいの大きさと言われています。桃米村は、埔里鎮というまちの市外にあって、自然豊かな地域です。海拔 420～800m という起伏に富んだ場所にあつて、周辺には日月潭という湖があります。ここは有名観光地であり、日本のガイドマップにもよく掲載されています。人口は約 1,100 人で、主な産業は農業や観光業です。なかでも観光業に関しては、1999 年にあつた地震がターニングポイントとなつた新しい産業で、それ以前は農業が主な産業でした。震災以前、桃米村は埔里鎮の中で最も貧しい地域の 1 つと言われていました。

次にターニングポイントとなつた地震について説明します。その地震とは 1999 年 9 月 21 日に起きた「921 大地震」です。これは別名、集集大地震ともいわれています。なぜなら、台湾中部の集集付近が震源域となつた地震であつたためです。マグニチュードは 7.6 で、被害は、台北市のまですりやりました。被害の特徴は農村が広範囲にわたつて被災したという点です。倒壊建物が多くみられ台湾全体での死亡者数は 2,455 人でした。ただ、桃米村においては、死者はゼロで、倒壊建物が 369 戸でした。その内の 168 戸が全壊、68 戸が半壊でした。桃米村における建物の半分以上が被害を受けたという状況でした。

(2) 震災後の桃米村における桃米生態村構想

そのような桃米村ですが、震災後はエコツーリズムを中心とした桃米生態村に生まれ変わりました。スライド 3 枚目が桃米生態村の全体の地図になります。中国語で書かれていて、さらに字が小さすぎて見えないかと思うのですが、桃米村で今、有名な名所となつているのが桃米生態村「新故郷見学園区」内にある「紙教堂」(ペーパードーム)です。この周りに、色々な公園、民宿があります。地図の青い点の部分が民宿で、今、ここには 39 軒の民宿があります。震災前、民宿は 1 軒だったにもかかわらず震災後はこれほど民宿ができています。また、この近くには、国立暨南国際大学という大学もあつて学生さんもたくさんいらっしゃいます。横の表が、主な公園、動植物などの自然資源、産業資源、文化資源で、インタープリター(ガイド)には、「新故郷文教基金会」、「桃米社区発展協会」、「桃米休閒農業区推展協会」という組織があります。これら資源を結びつけるものとしてトレイルがあり歩けるようになっています。

(3) 桃米生態村構想のキーパーソン

このエコツーリズムの考え方はどのように出てきたのかというと、キーパーソンである「新故郷文教基金会」の理事長 A 氏の存在があります。この基金会というのは震災が起こる半年前の 1999 年の 2 月に創設されました。今年の夏に桃米村を訪れ A 氏に聞き取りを行ったところ、「新故郷文教基金会」を中心に村の復興計画が生態村構想になつたということがわかりました。震災後桃米村の資源を調べたところ、村は豊かな生態資源に恵まれていることが明らかになつたそうです。例えばカエルでいうと台湾には固有種が 31 種類いるなかで、桃米村には 23 種類のカエルがいます。トンボに関しても、162 種の固有種がいるな

かで桃米村には69種類います。小さい村でこれだけのトンボやカエルが見られているのです。これをどう活用しようかと言う流れになり、この資源を守る、産業を起すためにエコツーリズムという考え方がよいのではないかということで、現在の桃米生態村ができたということです。

現在、この基金会は、「新故郷見学園区」という入園料が必要な園区を運営しています。「紙教堂」(ペーパードーム)を有する部分です。「紙教堂」は阪神・淡路大震災から10年後の2005年に、神戸で記念交流活動が行われたのをきっかけに、その後台湾に移設された建造物です。本当は取り壊す予定だったのですが、そのときちょうど記念交流活動で来ていた「新故郷文教基金会」のA氏が「これを壊すなら台湾に移設して再生したい」と提案したことから、神戸より桃米村にやってきたのです。「新故郷見学園区」での所要時間は1時間ほどで、園区内には、「紙教堂」のほかにレストランや土産物屋があります。地域の食材を使った、例えばハスの実を使ったランチ、アナナといわれるフルーツのフルーツジュースがあります。桃米村内には至る所にカエル、トンボ、チョウのモチーフの看板や置物があります。この村に行くと「ここはカエルのまちかな」というくらい、カエル等のキャラクターがたくさんあります。

観光客数はどのくらいかという、スライド4枚目です。これは「新故郷見学園区」における2014年から2018年までの月別、年別の人数です。2014年からだと下がっているように感じますが、それでも20万人が生態村なかでも「新故郷見学園区」にきています。月別では2月と8月、とくに8月が観光シーズンとなっていて、一番お客さんが多いです。

(4) 桃米生態村における住民の主体的な参加

住民の主体的な参加について、具体的に言うと、2001年、ちょうど1999年に構想ができてその1年、2年後あたりから、ガイド養成講座が開催されています。スライド5枚目は、私が調査に行った8月時のガイド養成講座の様態です。シニア層が多いのかなと思っていたら若い方、20代位の女性の方が結構いらっしゃいました。上の写真がガイド講座の授業風景です。教えている先生も実際にガイドをしている方で、以前にガイド講習を受けたことのある人です。この講座は、午前中に園内を回って、チョウやトンボの写真を撮ってきて、午後から講義という流れです。下の写真は、標本のチョウを見ながら、実際にこのチョウは何という名前なのかということ調べているところです。ガイド養成講座は、毎週月、火、水曜日に開かれていて、毎回、桃米村の人や桃米村のある埔里から約20人の参加者がいるとのことでした。

最近の出来事でいうと、2018年からはA氏、国立暨南国際大学の専門家を中心に、もっと中長期的な視点で今後のことを考えていて、桃米村だけでなく埔里全体を対象とするチョウをテーマにしたエコミュージアム、大埔里胡蝶森林公園という新たな展開が試みられています。継続的にいろいろな取り組みが行われている状況です。

4. 宮城県南三陸町の事例

(1) 南三陸町の概要

次に、2 事例目、宮城県南三陸町について説明していきます。宮城県南三陸町は、宮城県の北東部に位置していて東は太平洋に面し、三方を 300 から 500m の山々に囲まれた海と山とが一体となった自然環境を持つ地域です。町土の約 75% が森林となっていて、三方の山が山の尾根となっていて、降った雨水がそれぞれの川をつたって、南三陸町唯一の湾である志津川湾に流れていくという分水嶺になっていることが特徴です。沿岸部に関してはリアス式海岸となっていて、特有の豊かな景観を有していて三陸復興国立公園の一角を形成しています。その反面、こういった地形のため津波の影響を受けやすく、何度も大津波を受けています。

この地域は、2005 年に、志津川町と歌津町の 2 町が合併し、南三陸町となったのですが、それ以前は、入谷、志津川、戸倉が志津川町で、歌津が単独で歌津町でした。それよりもずっと前にさかのぼると、入谷村、戸倉村、歌津村、本吉村にわかれていました。志津川は、昔は本吉村という名称でした。この名残からか、町は 4 つの地区にわかれていて、現在も「入谷の人」と「歌津の人」というとらえ方がなされています。

人口は 2018 年 10 月で 1 万 2,300 人くらいです。これは長期で見ると緩やかな下降です。南三陸町が推測している今後の人口では 2025 年で多くて 1 万 1,000 人、少なくとも 9,500 人くらいになるだろうとされています。また産業に関しては、南三陸町は宮城県内で五番目の水揚げ高の漁港を擁していて、水産業を基点とした産業構造を形成しています。養殖業が中心で、ホヤ、牡蠣、ホタテやワカメが養殖されています。そのほか観光業や商業も一部で産業として発達しています。

ここは皆さんご存じの通り、2011 年 3 月 11 日に東日本大震災の被害を受けた地域です。南三陸町で最大震度 6 弱、津波は最大で 15.5m でした。死者は 619 人で、行方不明者 216 人、建物罹災率は中心部の志津川で 74% でした。志津川は南三陸町の市街地で、ここに役場、病院、商店などがありました。そこが 74% で役場や商店、病院が流されました。その他、高いところで戸倉の 77% でした。入谷は、海に面していない山奥に位置していたため、ほとんど建物が流出するということはなく、1.5% ほどでした。ここがいろんな地区の被災者を受け入れていました。ライフラインについては、電気で 2 カ月くらい止まり、水道は 5 カ月、避難者は 1 万人弱、33 の避難所にいました。

(2) 震災前後の南三陸町の観光動向

震災前の南三陸町の観光客数とはいうと、2008 年に、南三陸町で JR のディスティネーションキャンペーンがあったことを機に、それ以降伸びています。観光客を受け入れよう、どう受け入れたら盛り上がるのかということ地域全体で考え、2007 年に地域の人に自分の地域のことを語れるようになってもらうため、「ふるさと講座」というのを立ち上げました。これは地域住民がガイドになって南三陸町の歴史や産業などを話せるように勉強する

講座です。ここで、観光客を受け入れる体制が築られました。そして、2008年に観光客数が100万人を超えました。その後も100万人を超えていて、今後も増えていくであろうというときに、東日本大震災が起きました。その年は36万人にまで減りました。

ただ、その翌年には、80万人まで戻っています。今年、南三陸さんさん商店街における観光客数が100万人をこえたという報告もあり、震災前に戻ってきている状況です。ほかの被災地域よりかはその後回復率が早いのが特徴的です。しかし宿泊観光客数はなかなか上がらないというのが今の町の課題です。南三陸町には三陸道が通っていますが、現在、南三陸町はその最北のインターとなっています。そこから下りて、さんさん商店街等に行く観光客が多いのですが、その後三陸道が気仙沼の方まで伸びていく計画になっているので、今後は訪れる観光客が少なくなっていくのではないかと懸念があり、それが町としての課題でもあります。

そのような南三陸町との出会いは、今から6年ほど前に遡ります。震災時は、高校三年生で、私は大阪にいました。出身が大阪でして、翌月から東京の大学に行く予定でした。入学式がなく、計画停電などがあったのを覚えています。東北地方に以前から縁があったわけではなく、大変だなと思ってテレビ越しに見ていた、ただの傍観者でした。そんな私に転機が訪れたのは、大学2年生の時です。大学のエコツーリズムゼミに入った時です。そのゼミのフィールドワークの対象地域が南三陸町だったのです。南三陸町で、地域活性化の手段の一つとして、持続可能なエコツアープログラムを開発するという、エコツーリズムの事業化が主な目的で、その頃は、集落歩きをしたり、南三陸町の観光協会のプログラム体験をしたり、森の整備、地域住民への聞き書き、地域の祭りの手伝いなどをしていました。

(3) 南三陸町の地域資源

では、南三陸町をエコミュージアムの視点で見えていくとどうなるのか、その視点で見えます。すると、色々な資源があることが分かります。スライド8枚目に、志津川、歌津、入谷、戸倉地区でどのような自然資源、産業資源、文化資源があるのかを一部ですが、まとめました。産業の部分が大きく変容していることがわかります。一部、宿泊施設を書き漏らしているのですが、宿泊施設に関しては震災以前に行っていた場所から他の場所に移動したり、もともと宿泊施設だったところを震災後にレストランやカフェにかえたりした施設があるなど、震災前とは大きく変わっています。またその他、新しい商店街ができていたり、新たな水産業の直売所、飲食店ができていたりしています。また、震災後は、海だけでなく、地域にある山、森にも焦点があたり、山の価値を見直そうという考えが多く出てきており、海の見える命の森やANA ころの森、花見山という昔からある山で桜見物ができるようにと、花見山プロジェクトが行われていたりして、山や森という資源をいかした活動も行われています。

そのほかに文化資源として載せた防災対策庁舎、高野会館については現在、震災遺構とし

が残っています。防災対策庁舎に関しては、解体か保存かで揺れた末、2015年に宮城県の有識者会議で、宮城県が当分保有するという方針になりました。インタープリター(ガイド)としては、南三陸町観光協会や民間のガイドサークル潮風の語り部、一般社団法人復興みなさん会、南三陸ホテル観洋の語り部バスなどがあげられるかと思います。

(4) 南三陸町における歩く活動

では、南三陸町ではどういった歩く活動が行われているかということ、震災後はスライド9枚目に載せた活動が行われています。南三陸町観光協会が行っている語り部コースとして8つのコースがあります。また、ホテル観洋では語り部バスを出し、一般社団法人復興みなさん会では椿の避難路という避難路を整備してそこを歩けるようにしています。また、環境省による施設、海のビジターセンターにもみちのく潮風トレイルという歩く観光があります。今回は、南三陸町観光協会が行っている歩く観光と、一般社団法人復興みなさん会がやっている歩く観光について焦点をあてて話していきます。

(4) -1 南三陸町観光協会による「まちあるき語り部」

南三陸町観光協会による、まちあるき語り部とは、ガイドさんとともに町内のコースを約1時間歩くプログラムです。これが始まったのは震災から4年後の2015年です。少人数で歩くことができ、最小だと1人から、最大で5人までです。ガイドは、観光協会のスタッフ6人が行っています。この6人は南三陸町出身者や震災を経験した人で、自分の言葉で語るということを大事にしています。ただ、当初は個人向けの少ない人数でのプログラムでしたが、最近は10人くらいの研修で来る方が増えていて10人を2つのコースに分けて、まちあるき語り部プログラムが行われているそうです。個人の場合は、子連れや友だち同士のグループで訪れることが多いそうです。人気のコースとしては、高台から湾を眺める高台コース、防災対策庁舎を訪れる中心部コースです。まちあるき語り部の販売数は年々増えているという状況です。

(4) -2 一般社団法人復興みなさん会による「椿の避難路」

次に一般社団法人復興みなさん会の活動について説明します。

この組織は震災後にできて、仮設住宅内のコミュニティづくりや復興寺子屋、集落単位の話し合いの場作り、暮らし懇談会、南三陸椿ものがたり復興といった取り組みをしています。復興過程で地域住民の間で出てくる問題をどう解決していこうかということテーマに活動が行われています。そのうちの1つが、椿ものがたり復興です。

なぜこれが出てきたのかということ、2015年の5月に仮設住宅の集会所で開催された造園学会の報告会の後に1人のおばあさんによって「町も家もなくなってしまったけど、椿は根っこが強いから津波が来ても生き残ったんだ。でも、こんなおばあばの言うことなんて誰も信じないから誰にも言わないでね」という発言があったことからです。それを復興みなさん

会のある人が聞いていて、椿から復興のストーリーを作るのはどうかという話が出てきたのです。そして、2012年の8月に椿をテーマにワークショップが行われ、椿には様々な活用方法があることがわかったのです。種からは笛が作れたり、椿油が取れたり、花は天ぷらになったり、落ちた椿の花では首飾りができたりする、そして葉っぱからは漬物の塩抜きやお茶ができるということが話し合われました。このように椿はいろいろな展開が期待できる植物だねということがわかり、そこから椿を用いた復興まちづくり構想ができていきました。

そのなかには、椿を使った避難路を作ってはどうかという防災観光の提案も行われました。現在、椿の避難路は4つ作られていて、それらに共通していることは椿がもともと自生しているところだったこと、東日本大震災の時に実際に人々が逃げた道であったことです。ここでは、その一つである志津川にある上山公園と志津川小学校をつなぐ避難路をみていきます。上山公園は避難場所に指定されていて、東日本大震災時には地域住民300人避難したと言われていています。ただ、ここでも津波の恐れがあり、もっと上に上がろうと、その上の山にかけ登っていったそうです。その道が避難路になっています。両脇に16本ずつ植樹がなされました。現在はその植樹の椿が160cmくらいまで成長しています。実際に私も歩いてみたところ、上山公園を駆け上っていくと、多くの民家があって、その民家と民家の間に細い通路があります。その通路を通って行くと、椿の避難路と書いてある看板が立てられていました。その看板も復興みなさん会が作ったものです。看板の先は、鬱蒼とした森の中というイメージでした。この避難路に関わった人々としては、仮設住宅の人々のほか、南三陸町外の人も多く、2014年には兵庫県の修学旅行生150人が植樹していたり、福岡大学の学生が草刈りに来ていたりするなど、地域住民と地域外からボランティア、みんなで作っています。避難路の整備の他、仮設住宅の人向けに椿のバスツアーも行われています。

そのほか環境省によるみちのく潮風トレイルというトレイルもあります。南三陸町は2017年4月30日に全38kmのルートが開通しました。みちのく潮風トレイルは志津川、入谷、戸倉、歌津すべての地区を通っています。

5. まとめ

以上をまとめると、震災復興地域での歩く観光では、キーパーソンと中間組織が重要であること、住民の主体的な運営が必要であることが分かります。南三陸町の椿の事例では住民たちが椿の存在に気づいて、楽しみながら活動していこうという主体的な運営が行われていることが分かります。それらは記憶の継承、震災から学ぶという学びの場になっていて、こういったことが震災復興地域での歩く観光に含まれているといえるのではないかと思います。

以上です。ありがとうございます。

<<質疑応答>>

木村宏

ありがとうございました。実は樋口さんのところでも質疑の時間を取ろうと思っていましたが、時間がほぼ無くなっています。2つの震災を経験したその後に出来上がった地域のコミュニティやそれを紡ぐ道の話をしていただきました。質問ある方はいませんか。

岩本晃典

北海道大学の同じ所属の岩本です。僕も歩く観光について、イギリスを射程にして研究してきたのですが、特に震災という大きな出来事があった以降に、なぜ歩くという観光をトピックにして町の協働意識やシビックプライドを醸造する手段として使ったの疑問です。その二者間の共通性、文化の価値観の違いもあると思いますが、その差異について、また、実施してからの違いに何か特徴的なものがあるのかお聞きしたいです。

樋口葵

これまで、この地域含め田舎は車で移動するのが日常でした。それが、震災という災害時においては、違ったのです。自分たちの命を守るためには、車で通れない道、例えば獣道を使わないといけない、避難時にはそのような道を知っていないと逃げ切れない、それに気づいたことが、震災後に、歩くということに注目が集まったきっかけだと思います。自分たちが自分たちの町を知って、どこに逃げれば一番よいのかを知る必要があると気づかされたのだと思います。

そのほか震災後に、多くの人が気づかされたこととして、山と海のつながりもあります。震災後に南三陸町では国際認証を取った漁港、山の方ではFSC認証を取った森があります。震災で、海に大きな被害が出て、海の産業がやられたことで、山、森に目が向けられたのです。水産業って、海だけでやっているわけではなく、山からの養分等の流れも関係していて、山から海まで一連のつながりからできている、その価値に地域住民が気づいたのです。そこから山も活用していこうと、樫の避難路のような山を活用した活動、歩くことにつながる活動が始められたのだと思います。

樫の避難路に関しては実際、まだ歩いている人は多くない、どう継続的に歩ける場所にするかが課題となっています。特に夏は、草がボーボーになるので、歩けないという問題があります。そこは、どうにかしないといけないところです。

木村宏

私がずっと関わっています潮風トレイルは、2011年に被災してから7年、8年目に入りますが、今、樋口さんが言った、つながる、いろんな意味で道がつながることの価値を見だしながら今、正規の道になっており間もなく開通しようかというところです。そこでは、

震災の遺構を地域の人たちが知るとのこと、外から来た人にもそれを知っていただいて自分たちの地域に誇りを持ち、それによって震災で忘れられない人の命が繋がらなかったことも含めてこの道というものを歩くことで思い起こす、つながるということをテーマにしています。環境省が進めているこの潮風トレイルが、まさに樋口さんが取り組んでいる地域の道の中に入ってきています。これがバイウェイとして椿の避難路にもつながってくるとまた少し勢いが付いてくるのではないかなと思います。また人が歩くことで新しい交流が生まれてくるということにも期待したいところです。

文献

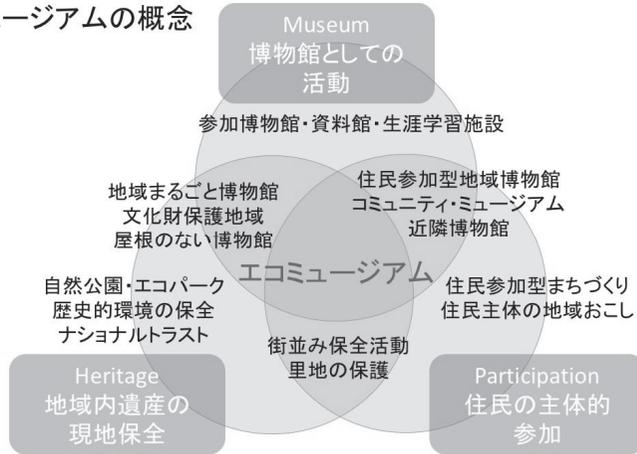
大原一興

1999 『エコミュージアムへの旅』 鹿島出版会

若生麻衣

2012 「台湾桃米生態村における産業構造の変容とインターメディアリの役割：復興再建型『社区総体营造（地域づくり）』政策と社区自治の発展」『龍谷大学大学院政策学研究 1』 pp.169-186

エコミュージアムの概念



出典: 大原, 1999

台湾桃米村



※本報告では、桃米里を桃米村と呼んでいます
出典: 若生, 2012



日月潭

サイクリング風景



- 位置: 台湾南投県埔里鎮
(台湾中部、埔里市街の西南約5km、
海拔420m~800mという起伏に富んだ場所)
- 総面積: 18平方km
- 周辺の観光施設: 「九族文化村」、「日月潭」など
- 人口: 約1,100人
- 主な産業: 農業、観光業

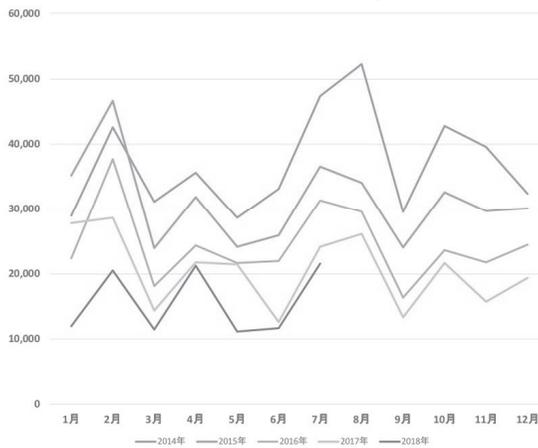


出典：桃米休閒農業區HP (<http://www.taomiala.com/24736369382669131859-attraction.html>)

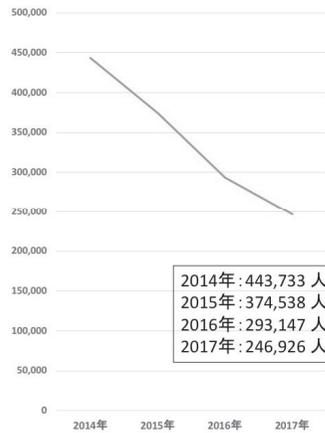
桃米村にある主な資源

テリトリー	桃米村	
コア及びサイト	自然	同心橋 親水公園 茅埔坑生態公園 チヨウ カエル トンボ
	産業	紙教堂(新故郷見学園区) 桃米社区工房 Cona's chocolate dream castle レストラン 民宿
	文化	福同宮
	インタープリター	新故郷文教基金会 桃米社区發展協会 桃米休閒農業区推展協会
発見の小路	Watertrail Ecological Trail Taomi walking trip	

桃米生態村にある「新故郷見学園区」の観光客数(月別)



(年別)



出典：新故郷文教基金会によるデータ

ガイド

- 現在、約30人の認定ガイドがいる
- 2001年からは、紙教堂のある新故郷見学園区で、トンボ、カエル(のちにチョウ)のガイド養成講座を行っている
- 民宿でも民宿経営者自身がガイドとなってお客さんを案内するプログラムを行っている
- 現在も、毎週月・火・水曜日にガイド養成講座を開いており、毎回桃米村、あるいは埴里鎮から約20名の参加者がいる



宮城県南三陸町とは



南三陸町の地図
(出典:ZENRINより筆者一部加筆)

- 人口
12,368人
(2018年10月現在)
- 特徴
分水嶺になっていることが特徴で、降った雨が唯一の湾である志津川湾に流れる
- 産業
水産業、特に養殖業が中心(ギンザケ・カキ・ホタテ・ホヤ・ワカメ)
そのほか観光業・商業

南三陸町にある主な資源

テリトリー	南三陸町			
	志津川地区	入谷地区	歌津地区	戸倉地区
自然	志津川漁	紫内山	伊里前流	橋島
	荒島	神行堂山	鹿島	竹島
	境島(岩山 男俣呂羽)	童子山	田東山	境島(岩山 女俣呂羽)
	太森山	ぼん山	伊里前川	大森山
	水炊川	秋吉川	蛇王川	折立川
	鮎井田川	桜川	桜川	神取崎
	八幡川	八幡川	弘川ダム	水戸田川
	野島の森	なまこ石 津ね石	田東山のツツジ	タツの木
	貞任山	神行堂山麓の巨石	シロウオ	リアスの森
	タツの大	神行堂海水浴場	漁師の森	千本柱
産業	タツの大	御休場の一木松	鹿島の森	☆自然環境造詣センター
	正徳の森	山がみの里展望台	千本柱	☆長瀬賢海水浴場
	★海の見える命の森	★ANAこころの森	☆魚籠館	
	★北の忍入峠			
	☆娘なかに渡館 夕風カフェ	さんさん館 宿泊施設	☆里親丸 農業体験	★明丸 農産物レストラン
	☆おさかな通り 商店街	入谷サンショップ	平成の森 宿泊施設	神取崎キャンプ場
	南三陸ホテル観洋 宿泊施設	まめ園工房	★かなつべ カフェ	志津川自然の家
	★南三陸さんさん商店街	★入谷YES工房	★南三陸直売所みなさん館	★南三陸美のびデジタルセンター
	★南三陸海産物加工工場	★松野や 農産物レストラン	★かなつべ カフェ	★島のり・津の家の家大自然塾
	★南三陸ホテルセンター 産直の店 みなみな堂	★南三陸まなびの里いりゆど 宿泊施設	★南三陸ハマレ歌津 商店街	★たみこの馬パック
文化	★魚市場キッチン	★入谷YES工房	★さとうみファーム	
	★南三陸リノバイオ施設			
	上山八幡宮	入谷八幡神社	伊里前三嶋神社	戸倉神社
	荒嶋神社	千人仏の坂	泊浜尾崎神社	天女塚
	大蔵寺	入谷の打撃子	荒沢不動尊	気仙沼・本宮地方最古の板
	海上斎場	岩倉崎 石取山(千枚山)	歌津の石浜神楽	戸山清水戸辺母子塚
	文章道	ひころの里 松笠屋敷(シルク館)	歌津のささよ	波丘登喜折塚
	権現寺			
	★高野会館 震災遺構			
	★南三陸町防災対策庁舎 震災遺構			
インターブリター	ガイドサークル汐風			
発見の小路	気仙道	羽沢峠	行者の道	燗火峠
	ふるさと緑の道	坂の貝峠	坂の貝峠	大塚峠
	浜金道	浜金道	弘川一年王野沢道	★みちの(潮風)トレイル
	★みちの(潮風)トレイル	入谷水尻峠	ふるさと緑の道	
	★みちの(潮風)トレイル	★みちの(潮風)トレイル		

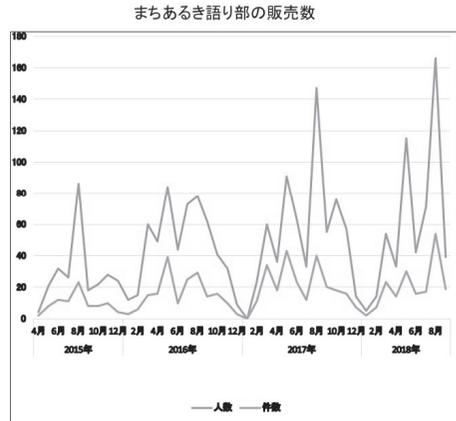
☆: 震災前にあった資源
★: 震災後にできた資源

歩く活動に関わる主な組織

組織	名称もしくは活動	活動開始時期	場所
南三陸町観光協会	高台コース	2015年	志津川 (志津川高校)
南三陸町観光協会	東方向コース	2015年	志津川
南三陸町観光協会	中心部コース	2017年	志津川 (防災対策庁舎)
南三陸町観光協会	東山公園コース	2017年	志津川
南三陸町観光協会	椿の避難路コース	2017年	志津川 (上山八幡宮)
南三陸町観光協会	西方向コース	2017年	歌津 (ハマレ歌津)
南三陸町観光協会	合格祈願コース	2017年	入谷
南三陸町観光協会	キラキラ南三陸コース	2017年	ガイドによって異なる
南三陸町観光協会	語り部による学びのプログラム	2011年	志津川・戸倉 (防災対策庁舎・戸倉小学校跡地・戸倉中学校など)
南三陸ホテル観洋	語り部バス	2011年	志津川・戸倉 (防災対策庁舎・戸倉小学校跡地・戸倉中学校・高野会館など)
一般社団法人復興みなさん会	南三陸椿ものがたり 椿の避難路(4ヶ所)	2012年	志津川 (上山八幡宮)
一般社団法人KOTネットワーク	海の見える命の森	森整備は2011年 2015年	志津川
環境省 南三陸町海のデジタルセンター	みちの(潮風)トレイル	2017年4月 (南三陸開通)	志津川・歌津・入谷・戸倉
南三陸ネイチャーセンター 友の会	南三陸イヌワン 火防線トレイル		

南三陸町観光協会による「まちあるき語り部」

- まちあるき語り部：ガイドさんとともに町内のコースを約1時間歩くプログラム
- 特徴：少人数の催行
（最少催行人数：1人 ※5人以上の場合は用相談）
（前日の18時まで予約受付可能）
- 料金：1人の場合7,000円・2人の場合3,500円・3人の場合2,500円・4人の場合2,500円・5人の場合2,000円
- ガイド：南三陸町観光協会スタッフ6人
（地元出身者、震災を経験した人）
- コース：8つ
- 人気コース：高台から志津川湾を眺める「高台コース」
防災対策庁舎跡を訪れる「中心部コース」



出典：南三陸町観光協会によるデータ

一般社団法人復興みなさん会の活動内容

- 仮設住宅内のコミュニティづくり
- 復興てらこ屋（町の復興計画や将来像について語り合う場）
- 集落単位の話し合いの場づくり、合意形成の支援
- 暮らし懇談会～復興公営住宅のコミュニティづくり～
- 南三陸 椿ものがたり復興



南三陸橋ものがたり
「樫の避難路」

- 樫が自生しているところ
- 東日本大震災で実際に人々が逃げた道

両脇に16本
ずつ植樹
(現在、150cm
まで成長中)



まとめ：震災復興地域での歩く観光

- キーパーソンと中間組織(メディエーター)の重要性
- 住民の主体的運営
 - 環境省「潮風トレイル」の住民による維持・活用の必要性
- 旅育
 - ・地域内遺産がもつ価値の発見と保全・活用によるエコツーリズム
 - ・「人と自然のつながり」、「人と人のつながり」
 - ・語り部:「記憶の継承」
 - ・自生していた「樫」の発見から防災観光へ
 - ・震災から学ぶという「学び旅」